







ある種の新鮮な感覚を覚えた。メロディーはおおらかで明るく、それでいて儀式にふさわしい品格のようなものも兼ね備えている。私は少し安堵した。最近になって、第一線で活躍する人物を紹介する「在る」と題された「朝日新聞」の特集記事が大島ミチル氏を取り上げ、「千羽鶴」のことにふれているのを読んだ。氏の母は被爆者であり、母校では前の記念歌である「平和は長崎から」を歌っていたという。そして「千羽鶴」は、ふだんは依頼に応ずるだけで自分のメッセージを作品に託すことのない氏が、仕事のため東京に住みながらめつたに帰ることのない故郷のために書いた、特別な意味を持った曲だということなのだ。そうした思いの深さは確かにあのメロディーや編曲に表れていたように思う。そこにも大島氏の遠きにありて思う「私の長崎」の力が働いていた。そうして記念歌は完成したのである。

その年の八月九日、私は平和祈念式典に初めて参列した。式典で歌われる「千羽鶴」を見届けたいという思いであった。金属探知器をくぐって参列者ために設置された巨大なテントに近づくと、奉安箱や献花台・献水台が置かれた場所の背後に、大きな折り鶴をあしらったモニュメントが設置されているのが目に入った。千羽鶴と違って拡大された折り鶴は鋭角が多くてデザインが難しいと、長崎市職員のK氏が語っていたことをふと思い出した。筋骨たくましい平和祈念像の下の折り鶴の鋭角はどこか戦闘的で落ち着かない感じを与えた。

テントの中にはわずかに空席が残っていたが、私は影をはずれた最後列に立った。式典は粛々と進行し、私はたちまち汗だくなかった。数ヶ月前に断裂した靱帯をつなぐ手術を受けた足首も痛み始めた。連絡をもらえれば席を用意するというK氏の言葉を思い出しながら、半ば意地になつて最後までそこに立っていた。しよせん「私の長崎」の外に在るだという拗ねたような気持もあったが、やはりそこが自分にふさわしい位置だと思つたからである。考えてみれば、私は原爆をめぐる問題を長崎だけに押しつけようとしていた。祈りはひとりひとりの私の「長崎」の表現なのであり、それを邪魔する権利は誰も持たない。

いよいよ「千羽鶴」が歌われる時が来た。被爆者をはじめとする地元の人々がそれを聴いてどんな感想を抱いたかは残念ながらわからない。少なくとも私には、式典の最後を飾る曲として悪くないと感じられた。そして、それから七年が過ぎた今日まで、「千羽鶴」は歌い継がれてきている。

結局のところ、自分にとつての「原爆の歌」は自分の声で歌うしかない。そのためには、一九九五年八月九日の日差し熱さや、原爆被爆とは何の関係もない手術後の傷の痛みから出発するより他はないのである。長崎に住み始めて八年間をぼんやりと過ごしていた私は、その時になつてようやく、そのような当たり前の結論に達したのであった。